

『世説新語』劉孝標注訳注稿（一）

佐竹 保子

『世説新語』劉孝標注研究会

はじめに

小稿は、科学研究費補助金（基盤研究（B））22320068「『世説新語』劉孝標注の漢魏六朝文献に関する総合的研究」における研究成果の一端である。該研究の現時点でのスタッフは、狩野雄、川合安、齋藤智寛、佐竹保子、塚本信也の5名である。

小稿には、『世説新語』德行篇第一の第1条から第14条までの訳注を収めてある。該訳注の直接の担当者は佐竹であるが、その原稿は上記スタッフによる検討を経ている。今回に続く德行篇第15条以下の劉注訳注も、以後同様の手法により、陸續と発表される予定である。

該研究会発足の経緯について、少しく説明させて頂きたい。該研究会は、2004年に東北大学文学部6階にて始まった『世説新語』読書会に源を発している。該読書会は、上記の川合、齋藤、佐竹のほかに、東洋史専攻院生の小尾孝夫（現在助手）、三田辰彦、中国思想中国哲学専攻院生の高橋睦美（現在助手）、畠山薫、中国語学中国文学専攻院生の平良妙子に参加メンバーとしていた。該読書会は数年続いたが、メンバーの留学や就職による他出にともなって、いったん自然消滅した。そののち、『世説新語』の本文ではなく、おもにその劉孝標注を研究対象として特化する形で生まれたのが、該研究会である。

『世説新語』は、中国南朝宋代の皇族である臨川王劉義慶（403年～444年）のもとで編纂された志人小説である。現存する36篇1300余条の逸話は、当時の言語・文体・思想風潮・時代背景を生き生きと伝えている。それゆえ漢魏晋の文学・言語・歴史・思想を考究する上で不可欠の資料となっており、注釈書や訳書、選集本なども多い。

しかし、『世説新語』それ自体に優るとも劣らず重要であるのは、そこに附されている、南朝梁代の劉孝標（462年～521年）の注である。劉孝標は、『世説新語』に登場する人物や事柄について、漢魏晋南朝の文献を博搜し、それらを引用する形で注を附している。注の字数は、『世説新語』本文の字数をはるかに上回る。引用された文献は、経書・史書・そ

の他の著書は 400 余種、詩賦散文などの文学作品は 70 余首にのぼる。しかもその多くが佚書・佚文である。これらが、漢魏晉南朝の文学語学・思想宗教・歴史を研究するに際しての宝庫であることは疑いない。実際、現在に至るまでの研究書や論文には、『世説新語』本文からの引用以上に、劉注からの引用が多い。

ところが、劉注それ自体についての研究は、本文に比べ遅れを取っている。近年刊行された『世説新語』の周到な注釈書である徐震罈氏の校箋本（中華書局香港分局 1987 年）、余嘉錫氏の箋疏本（上海古籍出版社 1993 年）、楊勇氏の校箋修訂本（正文書局 2000 年）、朱鈺禹氏の彙校集注本（上海古籍出版社 2002 年）などは、劉注についても考察を加えることがある。しかし、本文に比べれば微々たるものである。劉注の現代語訳に至っては、世界的に見ても、目加田誠氏の日本語訳（明治書院 1975 年～1978 年）があるばかりである。発刊されてすでに 30 数年を経ており、注釈もところどころ付されてはいるが、詳細とはいいがたい。すなわち、引用頻度が高いにもかかわらず、劉注の詳細正確な読解やそのための研究は、この 1500 年間ほとんど行われてこなかったと言っても過言ではない。

それゆえ該研究会は、研究の定礎として、劉孝標注の正確な訳注を作成することを選択した次第である。

訳注についての凡例を、以下に掲げる。

- 一 底本には、金沢文庫本の宋本（文学古籍刊行社影印 1955 年）を用いる。前述のように、『世説新語』には、著名な出版社からの校点本が複数公刊されている。しかし、研究会スタッフが見る限り、少なくとも劉孝標注については、その校訂が適切であるとはいいがたい。あまりに武断な校訂と考えられる例も少なくない。小稿は、宋本で読めるところは能う限りそのまま読み、どうしても読めない部分にのみ注記を入れ、訳を注記のほうに合わせることにする。
- 二 『世説新語』本文の訳注は、紙幅の関係もあり、掲載を省略する。前述のとおり、『世説新語』本文の訳注は、従来数多く試みられている。該研究会の本文訳注も、それらを大きく出ることはないであろうと判断されたからでもある。本文は、〈本文〉と記した後に、各条の原文のみを記載する。その句読点は該研究会に拠り、鉤括弧は用いない。
- 三 『世説新語』宋本では、各条本文の間に劉孝標注が双行注の形で挿入されている。小稿ではそれらを、①、②、③のように丸数字で代替し、各条〈本文〉の後に〈劉注〉と記して丸数字を再掲し、それぞれに該当する劉孝標注を書き入れる。
- 四 劉孝標注については、原文、その現代日本語訳、およびその注釈を載せる。原文の句

読点は該研究会に拠り、鉤括弧を用いない。現代日本語訳と注釈はもとより該研究会に拠る。この両者には必要に応じて鉤括弧を用いる。

- 五 注釈で用いた文献のうち、基本的に正史は百衲本、『文選』は巻数の揃っている尤袤本（石門図書有限公司影印 一九七六年）、『初學記』は全國高校古籍整理研究工作委員會編『日本宮内廳書陵部藏宋元版漢籍影印叢書』第一輯所収影宋本（綫装書局影印 二〇〇一年）、『北堂書鈔』は孔広陶校註本（宏業書局影印 一九七四年）、『芸文類聚』は影宋本（中華書局影印 一九五九年）、『太平御覽』は影宋本（中華書局影印 一九六〇年）を用いる。それ以外は断り書きのない限り、四部叢刊本に拠る。

徳行篇第一

〈本文〉

1. 陳仲舉言爲士則、行爲世範、登車攬轡、有澄清天下之志^①。爲豫章太守^②、至、便問徐孺子所在、欲先看之^③。主簿曰、群情欲府君先入廨。陳曰、武王式商容之間、席不暇煖^④。吾之禮賢、有何不可^⑤。

〈劉注〉

- ① ⁽¹⁾ 汝南先賢傳曰

陳蕃、字仲舉、汝南平輿人。有室荒蕪不掃除、曰、大丈夫當爲國家掃天下。值漢桓之末、閹豎用事、外戚豪橫。及拜太傅、與大將軍竇武謀誅宦官、反爲所害。

- ② ⁽²⁾ 海內先賢傳曰

蕃爲尚書、以忠正忤貴戚、不得在臺、遷豫章太守。

- ③ ⁽³⁾ 謝承後漢書曰

徐穉、字孺子、豫章南昌人。⁽⁴⁾清妙高時、超世絕俗、前後爲諸公所辟、雖不就、及其死、萬里赴弔。常預炙雞一隻、以綿漬酒中、暴乾以裹雞、徑到所赴冢隧外、以水漬綿、斗米飯、白茅爲籍、以雞置前、酌酒畢、留謁即去、不見喪主。

- ④ ⁽⁵⁾ 許叔重曰

商容、殷之賢人、老子師也。車上踞曰式。

- ⑤ ⁽⁶⁾ 袁宏漢紀曰

蕃在豫章、爲穉獨設一榻、去則懸之。見禮如此。

〈劉注の訳注〉

① 『汝南先賢伝』にいう。

陳蕃は、字が仲舉で、汝南郡平輿県の人である。居室が荒れ放題でも掃除をせずに、「立派な男子は、国家のために天下を掃除せねば」と言っていた。漢の桓帝の時代の末期には、宦官が権力を握り、外戚が専横をきわめていた。(陳蕃は)太傅に任ぜられると、大將軍の竇武と宦官誅殺をはかったが、逆に(彼らに)殺された。

② 『海内先賢伝』にいう。

(陳)蕃は尚書になると、公正なまじめさで貴顕や外戚とぶつかって、朝廷にいられなくなり、豫章太守に左遷された。

③ 謝承の『後漢書』にいう。

徐穉は、字が孺子、豫章郡南昌県の人である。清らかで高踏的で、世俗の交遊を絶ち、何度も高官たちに(部下になるようにと)招かれ、出仕はしなかったけれども、招いた高官が死ぬと、万里の遠くからでも弔問に赴いた。いつも焼いた鶏を一羽用意し、真綿を酒に漬け、日にさらして乾かして鶏を包んでおいた。(喪の知らせを受けると)ただちに目当てのお墓の墓道の外に行って、水に真綿を漬け、一斗の米飯を用意し、白いちがやを敷いて、鶏を前に備えた。酒を地に注ぎおわると、名刺を残してすぐに去り、喪主に会うこともなかった。

④ 許叔重がいう。

商容は、殷の賢人で、老子の先生であった。車の上でひざまずくのを式という。

⑥ 袁宏の『漢紀』にいう。

(陳)蕃が豫章に(太守として)居たころ、徐穉のためにだけ長椅子を用意し、(徐穉が)去ると壁に懸けておいた。(徐穉は陳蕃に)かくも礼遇されていた。

(1) 汝南先賢傳曰

「汝南先賢傳」は、『隋書』経籍志史部雜伝類に「汝南先賢傳 五卷 魏周斐撰」とある。ただし『舊唐書』経籍志には「汝南先賢傳 三卷 周斐撰」とあり、撰者の名が異なる。「汝南」は、現在の河南省汝南県北東付近。「周斐」あるいは「周裴」の経歴は不明。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十六陳蕃伝に、次のようにある。ただし()は引用者が付した。以下も同じ。「陳蕃、字仲舉、汝南平輿人也。祖河東太守。蕃年十五、嘗閑處一室、而庭宇蕪穢。父友同郡薛勤來候之、謂蕃曰『孺子、何不洒掃以待賓客』。蕃曰『大丈夫處世、當掃除天下、安事一室乎!』勤知其有清世志、甚

奇之。」「永康元年、(桓)帝崩。竇后臨朝、詔曰『(前略)其以蕃爲太傅、錄尚書事』」、
「中常侍曹節・王甫等與共交構、詔事太后。(中略)蕃常疾之、志誅中官、會竇武亦有謀。」、
「及事泄、曹節等矯詔誅武等。蕃時年七十餘、(中略)遂執蕃送黃門北寺獄。(中略)即日害之。」。

(2) 海内先賢傳曰

「海内先賢傳」は、『隋書』經籍志史部雜傳類に「海内先賢傳 四卷 魏明帝時撰」とある。ただし『舊唐書』經籍志には「海内先賢傳 四卷 魏明帝撰」とあり、「時」字が脱落している。「魏明帝時」は、二二七年～二五四年。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十六陳蕃伝に、次のようにある。「稍遷、拜尚書。時零陵・桂陽山賊爲害、公卿議遣討之、又詔下州郡、一切皆得舉孝廉茂才。蕃上疏駁之曰「(略)」以此忤左右、故出爲豫章太守。」

(3) 謝承後漢書曰

「謝承後漢書」は、『隋書』經籍志史部正史類に「後漢書 一百三十卷 無帝紀 吳武陵太守謝承撰」とある。『舊唐書』經籍志には「後漢書 一百三十三卷 謝承撰」。

「謝承」は、吳の孫権の夫人の弟。陳寿『三國志』卷五十吳書五妃嬪伝に「吳主權謝夫人、會稽山陰人也。(略)弟承、拜五官郎中。稍遷長沙東部都尉・武陵太守。撰後漢書百餘卷。」、裴松之注に「會稽典錄曰、承、字偉平、博學洽聞、嘗所知見、終身不忘。子崇、揚威將軍。崇弟勛、吳郡太守。並知名。」。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷四十三徐穉伝に「徐穉、字孺子、豫章南昌人也。(略)穉嘗爲太尉黃瓊所辟、不就。及瓊卒歸葬、穉乃負糧徒步、到江夏赴之、設雞酒薄祭、哭畢而去、不告姓名。」、李賢注に「謝承書曰、穉、諸公所辟、雖不就、有死喪、負笈赴弔。常於家預炙雞一隻、以一兩縣絮漬酒中、暴乾以裹雞、徑到所起冢隧外、以水漬縣、使有酒氣、斗米飯、白茅爲藉、以雞置前、醢酒畢、留謁則去。不見喪主。」とある。

また、『文選』卷五十五劉孝標「廣絶交論」に「及(任昉)瞑目東粵、歸骸洛浦。縶帳猶懸、門罕漬酒之彥」とあり、その李善注に「謝承後漢書曰、徐穉、字孺子。前後州郡選舉、諸公所辟、雖不就、有死喪、負弔萬里。常於家預炙雞一隻、一兩縣漬酒、日中曝乾、以裹雞、徑到所赴冢隧外、以水漬之、使有酒氣。升米飯、白茅藉、以雞置前。醢酒畢、留謁即去、不見喪主」と、「謝承後漢書」が引用されている。

さらに、袁宏『後漢紀』卷二十二(四部叢刊本)には、「稚、字孺子、豫章南昌人也。(中略)陳蕃嘗爲豫章太守、以禮請署功曹。稚爲之起、既謁而退。蕃饋之粟、受而分諸鄰里。舉有道、起家拜太原太守、皆不就。諸公所辟、雖不就、其有死喪者、負笈徒步、

千里赴弔、斗酒隻雞、藉以白茅、酌畢便退。喪主不得知也。初稚、少時遊國學中、江夏黃瓊教授於家。故稚從之、諮訪大義。瓊後仕進、位至三司。稚絕不復交。及瓊薨、當葬、稚乃往赴弔、進酌哀哭、而去。人莫知者。時天下名士、四方遠近、無不會者。各言聞豫章徐孺子來、何不相見。推問喪宰曰『頃寧有書生來邪』。對曰『先時有一書生來。衣麤薄而哭之哀。不記姓字』。僉曰『必孺子也』、応劭『風俗通義』卷三（四部叢刊本）には「公車徵士、豫章徐孺子、比爲太尉黃瓊所辟、禮文有加。孺子隱者、初不答命。瓊薨、既葬、負笥舁涉、齎一盤醢、哭於墳前。孫子琰、故五官郎將、以長孫制杖、聞有哭者、不知其誰、亦於倚廬、哀泣而已。孺子無有謁刺、事訖便去。子琰大恠其故、遣瓊門生茅季瑋追請辭謝、終不肯還」とある。さらに、『太平御覽』卷四〇三所引「海內先賢行狀」には、「徐孺子、徵聘未嘗出門、赴喪不遠萬里。常事江夏黃公、薨、往會其葬。家貧、無以自供、齎磨鏡具自隨。每至所在、賃磨取資、然後得前。既至設祭、哭畢而返。陳仲舉爲豫章太守、召之則到、饋之則受。但不服事、以成其節」、同卷四七四所引「謝承後漢書」には、「徐穉、字孺子、豫章人。家貧、常自耕稼。恭儉義讓、所居服其德。屢辟公府、不起。時陳蕃爲太守、以禮請署功曹。穉不免之、既謁而退。蕃在郡、不接賓客、唯穉來、特設一榻、去則懸之。後舉有道、拜太原太守、皆不就」とある。

なお、徐穉の香典について、『朱子語類』卷一三五に次のような言及がある。『晉書謝注』の示教による。「徐孺子、以綿漬酒、藏之雞中。去弔喪、便以水浸綿、爲酒以奠之、便歸。所以如此者、是要用他自家酒、不用別處底。所以綿漬者、蓋路遠、難以器皿盛故也 燾」。

(4) 清妙高時

四字目の「時」は「時」字の誤りと判断される。四部叢刊本、四庫全書本は「時」に作る。

「清妙」は、超俗的で清らかであること。『文選』卷五十八所収の後漢の蔡邕「郭有道碑文」に「委辭召貢、保此清妙」、『後漢書』列伝卷二十七丁鴻伝に付された李賢注に「續漢書載駿書曰『臣聞武王克殷、封比干之墓、表商容之間。二人無功、下車先封之、表善顯仁、爲國之砥礪也。伏見丁鴻經明行修、志節清妙』。由是上賢之也」、同列伝卷五十八符融伝に付された李賢注に「謝承書『潁川張元祖、志行士也、來存融、弔其妻亡、知其如此、謂言『足下欲尚古道、非不清妙。且禮設棺槨、制杖章、孔子曰『吾從周』』。便推所乘羸牛車、命融以給殯。融受而不辭也』」

「高時」は、高みにあつて高踏的であること。『後漢書』列伝卷四十九張衡伝に張衡「思玄賦」を収めて「系曰、天長地久歲不留、俟河之清祇懷憂。願得遠度以自娛、上下無常窮六區。（中略）松・喬高時孰能離、結精遠遊使心攜」（『文選』卷十五にも）と

あり、その李賢注に「字林曰『跼、踞也』。謂得仙高踞也。離、附也。攜、離也」と記す。また『三国志』卷四十二蜀書十二郤正伝に郤正「釋譏」を収めて「然吾不才、在朝累紀。託身所天、心焉是恃。樂滄海之廣深、歎嵩嶽之高跼」とある。

(5) 許叔重曰

「許叔重」は、許慎の姓字。范曄『後漢書』列伝卷六十九下儒林伝下許慎伝に「許慎、字叔重、汝南召陵人也。(略)初、慎以五經傳說、臧否不同、於是撰爲五經異義、又作說文解字十四篇、皆傳於世。」とある。『隋書』經籍志經部論語類に「五經異義 十卷 後漢太尉祭酒許慎撰」、同部小学類に「說文 十五卷 許慎撰」、同志子部雜家類に「淮南子 二十一卷 漢淮南王劉安撰 許慎注」とある。

『淮南子』主術訓に「武王伐紂、(中略)封比干之墓、表商容之間」とあり、その注に「商容、殷之賢人、老子師。故表顯其里」とある。ただし、主術訓注は、『四庫提要』も、島田翰『古文舊書考』(廣文書局 1967年)巻4も、高誘注であると判断している。ほぼ同様の記述が『呂氏春秋』慎大覽に「武王勝殷、入殷、(中略)封比干之墓、靖箕子之宮、表商容之間」とあり、その高誘注にも「商容、殷之賢人、老子師也。故表異其間里」とあるのが、参考となる。他方、『淮南子』繆稱訓には「老子學商容、見舌而知守柔矣」とあり、注に「商容、神人也。商容吐舌、示老子、老子知舌柔齒剛」と記す。繆稱訓注は、島田氏が許慎注と推定し、金谷治『秦漢思想史研究』(平樂寺書店 1981年加訂増補版)460頁も島田説を「ほぼ定説と認めてよい。」という。ところが、本条で劉注が「許叔重曰く」として引く文とは異なっている。この劉注は、あるいは『淮南子』主術訓注の一文が、六朝齊梁代に許慎の文と考えられていた可能性を示唆するものかもしれない、注目される。

『藝文類聚』巻三十四所引「嵇康高士傳」に「商容有疾。老子問之。容曰『子過故鄉而下車、知之乎』。老子曰『非謂不忘故耶』」、『太平御覽』巻五〇九所引「嵇康高士傳」には「商容不知何許人也。有疾。老子曰『先生無遺教以告弟子乎』。容曰『將語。子過故鄉而下車。知之乎』。老子曰『非謂不忘故耶』。容曰『過喬木而趨。知之乎』。老子曰『非謂其敬老耶』。容張口曰『吾舌存乎』。曰『存』。曰『吾齒存乎』。曰『亡』。『知之乎』。老子曰『非謂其剛亡而弱存乎』。容曰『嘻。天下事盡矣』と、「老子」との関わりが記されている。

後半の「式」については、現行の許慎『說文解字』には「踧、長踧也」とあるのみである。

(6) 袁宏漢紀曰

「袁宏漢紀」は、『隋書』經籍志史部古史類に「後漢紀 三十卷 袁彥伯撰」とある。

「袁宏」は、東晋の人で彦伯はその字。房玄齡他『晋書』卷九十二文苑伝袁宏伝に「袁宏、字彦伯、侍中猷之孫也。(略)撰後漢紀三十卷及竹林名士傳三卷、詩賦誄表等雜文凡三百首、傳於世。」

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷四十三徐穉伝に「時陳蕃爲(豫章)太守、以禮請署功曹、穉不免之、既謁而退。蕃在郡不接賓客、唯穉來特設一榻、去則縣之」とある。

〈本文〉

2. 周子居常云、吾時月不見黃叔度、則鄙吝之心、已復生矣。①

〈劉注〉

⑦ 子居別見。⁽¹⁾

⁽²⁾
典略曰

黃憲、字叔度、汝南慎陽人。時論者咸云、顔子復生。而族出孤鄙、父爲牛醫。潁川荀季和執憲手曰、足下、吾師範也。後見袁奉高曰、卿國有顔子、寧知之乎。奉高曰、卿見吾叔度邪。戴良少所服下、見憲、則自降薄、悵然若有所失。母問、汝何不樂乎。復從牛醫兒所來邪。良曰、瞻之在前、忽焉在後。所謂良之師也。

〈劉注の訳注〉

① 周子居(周乗)については、他のところに示す。

『典略』にいう。

黄憲は、字が叔度で、汝南慎陽の人である。当時の論客はみな「顔(回)先生が生き返った」と言った。だが、出自は卑しく、父は牛医であった。潁川の荀季和(荀叔)は、黄憲の手を取って言った。「そなたは、私のお手本です」。のちに袁奉高(袁閔)に会って言った。「おくに顔先生がおられますが、ご存知でしょうか」。奉高は言った。「きみは私のところの叔度にあったのですか」。戴良は、他人に敬服することがほとんどなかったが、憲にあうと、自己卑下をして、がっくりと喪失感にとらわれた。母が尋ねた。「お前は どうして不機嫌なのですか。また牛医のせがれのところから戻ったのですか」。良は言った。「前に見えたと思うと、たちまち後ろに居る。(あたかも孔子のような) いわゆる私の先生です」。

(1) 子居別見

子居は、周乗のこと。『世説新語』賞譽篇第一条の劉注に次のようにある。「汝南先賢傳曰、周乗、字子居、汝南安城人。天資聰明、高峙嶽立、非陳仲舉・黃叔度之儔、則不交也。仲舉嘗歎曰、周子居者、眞治國之器也。爲太山太守、甚有惠政」。ただし、次注に引く『後漢書』黃憲伝には「同郡陳蕃・周舉常相謂曰『時月之間不見黃生、則鄙吝之萌、復存乎心』」と記される。周舉は、『後漢書』列伝卷五十一に伝があり、「周舉、字宣光、汝南汝陽人。陳留太守防之子」とある。

「汝南先賢傳」については、本篇第一条の注(1)参照。

(2) 典略曰…

「典略」は、『隋書』經籍志史部雜史類に「典略 八十九卷 魏郎中魚豢撰」とある。『舊唐書』經籍志史部正史類には「魏略 三十八卷 魚豢撰」、雜史類には「典略 五十卷 魚豢撰」とある。興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』（汲古書院 一九九五年）二九九頁は、『史通』古今正史篇の「魏時、京兆魚豢私撰魏略、事止明帝」を引いて「典略と魏略は本来一体の書であり、舊唐書はそれを二箇所分割して著録したものと思われる。」と判断する。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷四十三黃憲伝に次のようにある。

「黃憲、字叔度、汝南慎陽人也。世貧賤、父爲牛醫。潁川荀淑至慎陽、遇憲於逆旅、時年十四、淑竦然異之、揖與語、移日不能去。謂憲曰『子、吾之師表也』。既而前至袁閔所、未及勞問、逆曰『子國有顏子、寧識之乎』。閔曰『見吾叔度邪』。是時、同郡戴良、才高倨傲、而見憲、未嘗不正容。及歸、罔然若有失也。其母問曰『汝復從牛醫兒來邪』。對曰『良不見叔度、不自以爲不及。既覩其人、則瞻之在前、忽焉在後。固難得而測矣』。同郡陳蕃・周舉常相謂曰『時月之間、不見黃生、則鄙吝之萌、復存乎心』」。ただし、所引の『後漢書』の「袁閔」「閔」は、王先謙『後漢書集解』所引の陳景雲の説に従って、「袁閔」「閔」を改めた。『後漢書』列伝卷三十五袁安伝付袁閔伝に「閔、字夏甫」とあり、字が「奉高」ではないため。

王先謙『後漢書集解』には「惠棟曰、周斐汝南先賢傳、憲、黃中通理、齊聖廣淵。不矜名以詭時、不抗行以矯俗。闢其門者、莫敢踐其庭。睹其流者、不敢測其深。論者咸曰、顏子復生乎漢之代矣」とある。

(3) 瞻之在前、忽焉在後

顏淵が孔子を評したことばを襲っている。『論語』子罕篇に「顏淵喟然歎曰『仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能。既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、未由也已』」とある。

〈本文〉

3. 郭林宗至汝南、造袁奉高^①。車不停軌、鸞不輟輶、詣黃叔度、乃彌日信宿。人問其故、林宗曰「叔度汪汪、如萬頃之波、澄之不清、擾之不濁。其器深廣、難測量也^②。」

〈劉注〉

① 續漢書曰

郭泰、字林宗、太原介休人。泰、少孤、年二十、行學至城阜屈伯彦精廬。⁽²⁾ 乏食、衣不蓋形、而處約味道、不改其樂。⁽⁴⁾ 李元禮一見稱之曰、吾見士多矣、無如林宗者也。⁽⁵⁾ 及卒、蔡伯喈爲作碑、曰、吾爲人作銘、未嘗不有慙容。唯爲郭有道碑、頌無愧耳。⁽⁶⁾ 初、以有道君子徵。泰曰、吾觀乾象人事、天之所廢、不可支也。⁽⁷⁾ 遂辭以疾。

⁽⁸⁾ 汝南先賢傳曰

⁽⁹⁾ 袁閑、字表高、慎陽人。友黃叔度於童齒、薦陳仲舉於家巷。辟太尉掾、卒。

② 泰別傳曰

⁽¹⁰⁾ 薛恭祖問之。泰曰、奉高之器、譬諸汜濫、⁽¹¹⁾ 雖清、易挹也。

〈劉注の訳注〉

① 『續漢書』にいう。

郭泰は、字が林宗で、太原介休の人である。泰は、若くして父を亡くし、二十歳で、学問をしに、城阜の屈伯彦の学び舎に行った。食べ物は乏しく、衣服はぼろであったが、つましい暮らしで道を味わい、(顔回のように)その楽しみを変えることがなかった。李元禮(李膺)は一目見て、ほめたたえた。「たくさんの人士を見てきたが、林宗に及ぶ者はいない」。亡くなると、蔡伯喈(蔡邕)が彼のために碑文を書いて言った。「ひとの碑銘を書くと、(褒め過ぎになるために)恥じ入らないためしはなかった。だが郭有道の碑だけは、いかに褒めても恥ずかしくない」。これより先に、有道の君子だということでお上より召し出されたが、泰は言った。「天文の予兆や社会現象を見るに、天が滅ぼそうとしているものを、支えることはできない」。そこで病気を理由に辞退した。

『汝南先賢傳』にいう。

袁宏は、字が奉高で、慎陽の人である。黄叔度(黄憲)をおさななじみとし、陳仲舉(陳番)を民間から推薦した。太尉府の掾に召されて、没した。

② 『(郭) 泰別傳』にいう。

薛恭祖が尋ねた。(郭) 泰は言った「奉高(袁閔)のうつわは、湧き出る泉のよう、清らかだが、たやすくすくえる」。

(1) 續漢書曰

「續漢書」は、『隋書』経籍志史部正史類に「續漢書 八十三卷 晉秘書監司馬彪撰」とある。「司馬彪」は、西晋の皇族。『晋書』卷八十二本伝に「司馬彪、字紹統、高陽王睦之長子也。(中略)彪乃討論衆書、綴其所聞、起于世祖、終于孝獻、編年二百、錄世十二、通綜上下、旁貫庶事、爲紀・志・傳凡八十篇。號曰續漢書。(中略)惠帝末年卒、時年六十餘」とある。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十八郭太伝に、次のようにある。「郭太、字林宗、太原界休人也。家世貧賤。早孤、(中略)就成皋屈伯彥學。三年業畢、博通墳籍。善談論、美音制。乃游於洛陽。始見河南尹李膺、膺大奇之、遂相友善。(中略)司徒黃瓊辟、太常趙典舉有道。或勸林宗仕進者、對曰『吾夜觀乾象、晝察人事。天之所廢、不可支也』。遂並不應。(中略)建寧元年、太傅陳蕃・大將軍竇武爲閹人所害、林宗哭之於野、(中略)明年春、卒于家。時年四十二。四方之士千餘人、皆來會葬。同志者、乃共刻石立碑、蔡邕爲其文、既而謂涿郡盧植曰『吾爲碑銘多矣、皆有慙德。唯郭有道、無愧色耳』。

劉注所引の「續漢書」には「郭泰」とあり、范曄『後漢書』は「郭太」に作る。李賢の注は、范曄が父の諱「泰」を避けて「太」に改めた、と説明する。「范曄父名泰。故改爲此『太』。鄭公業之名、亦同焉」。

(2) 精廬

「精廬」は書齋、学び舎。『後漢書』列伝卷四十三姜肱伝の、姜肱の人徳に感じた盜賊が姜肱のもとに謝罪に来たくだりに「盜聞而感悔、後乃就精廬、求見徵君」、李賢注に「精廬、即精舎也」とある。また、同列伝六十九下儒林伝下の「論曰」に、「光武中年以後」に儒学が盛行したことを述べて「若乃經生所處、不遠萬里之路。精廬暫建、贏糧動有千百」、李賢注に「精廬、講讀之舎」とある。

(3) 乏食、衣不蓋形

似た言い回しとして、李善注『文選』卷二十九曹植「雜詩」六首の二に付された李注に「列女傳、曾子謂黔婁妻曰『先生在時、食不充虛、衣不蓋形』。文子曰『聖人食足以充虛接氣、衣足以蓋形禦寒』。『古列女傳』(四部叢刊本)卷二「賢明傳」の「魯黔婁妻」には、「曾子曰『先生在時、食不充口、衣不蓋形。(後略)』」とある。

(4) 處約味道

「處約」は、「不仁者」には不可能な行爲。『論語』里仁篇に「子曰『不仁者、不可以久處約、不可以長處樂』」、何晏注に「孔安國曰、久困則爲非也」とある。

「味道」は、「師表」となる身の処しかた。『漢書』卷一百叙伝および『文選』卷四十五所収の班固「答賓戲」に、「若廼（伯）夷抗行於首陽、（柳下）惠降志於辱仕、顔（回）潛樂於簞瓢、孔（丘）終篇於西狩。聲盈塞於天淵、眞吾徒之師表也。（中略）故曰、愼脩所志、守爾天符。委命供己、味道之腴」、李善注に「桓譚答楊雄書曰『子雲、勤味道腴者也』」とある。

(5) 不改其樂

「道」を楽しむこと。孔子が顔回を評した言葉である。『論語』雍也篇に「子曰『賢哉、回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其樂。賢哉、回也』」、何晏注に「孔安國曰、顔淵樂道、雖簞食在陋巷、不改其所樂也」とある。

(6) 蔡伯喈爲作碑、曰…

『太平廣記』卷一六九に、「世説」を出典とする故事として、次のようにある。「郭泰、秀立高峙、澹然淵停。九州之士、悉懷懷宗仰、以爲覆蓋。蔡伯喈告盧子幹・馬日碑曰『吾爲天下作碑銘多矣。未嘗不有慚。唯爲郭先生碑、頌無愧色耳』 出世説」。余嘉錫氏は、『太平廣記』所収の文章が、元来の劉注であり、現行のものは宋人が削った結果であろう、という。「疑所引既是此注。其詳略不同者、今本已爲宋人所刊削故也」。

(7) 天之所廢、不可支也

范曄『後漢書』列伝卷五十八郭太伝に付された李賢注には、「左傳、晉汝叔寬之詞」とある。晋の汝叔寬が、周の萇弘を評した言葉である。杜預注によれば、すでに天命の衰えた周を、萇弘が遷都によって長らえさせようとしていることを、批判したもの。『左傳』定公元年に、「晉女叔寬曰『周萇弘・齊高張、皆將不免。萇叔違天、高子違人。天之所壞、不可支也。衆之所爲、不可好也』」、杜預注に「天既厭周德。萇弘欲遷都、以延其祚。故曰違天」とある。

(8) 汝南先賢傳曰

「汝南先賢傳」については、本篇第一条の注(1)参照。

所引の文章に類似した一節は見当たらないが、「袁奉高」については、本篇第2条注(2)所引の『後漢書』列伝卷四十三黄憲伝を参照。ただし、同伝はもともと「袁閔」ではなく「袁閔」に作っていたが、王先謙集解所引の劉攽の考証により、「袁閔」に改められている。なお、李善注『文選』卷五十八所収王儉「楮淵碑文」の李善注は、「范曄後漢書」の当該部分を引用しており、尤袁本は「郭林宗、少遊汝南、先過袁宏」、北宋刻遞修本（北

京図書館出版社影印 2006 年)は「郭林宗、少遊汝南、先過袁閔」に作るが、同一箇所にあたる『文選集注』(上海古籍出版社影印 2000 年)卷一一六は「郭林宗、少遊汝南、先過袁閔」に作っている。『文選集注』の件は余嘉錫氏が指摘している。

「袁閔」は、『後漢書』列伝卷四十六王龔伝にも、汝南太守王龔の功曹として登場し、招いた陳蕃の態度に腹を立てた王龔をたしなめ、陳蕃を厚遇させている。「(王龔) 明年遷汝南太守。政崇温和、好才愛士、引進郡人黃憲・陳蕃等。憲雖不屈、蕃遂就吏。蕃性氣高明、初到、龔不即召見之、乃留記謝病去。龔怒、使除其録。功曹袁閔請見、言曰『聞之傳曰「人臣不見察於君、不敢立於朝」。蕃既以賢見引、不宜退以非禮』。龔改容謝曰『是吾過也』。乃復厚遇待之。由是後進知名之士、莫不歸心焉。閔、字奉高、數辭公府之命、不修異操、而致名當時」。王龔伝には明らかに「閔、字奉高」と記されており、この「袁閔」は、陳蕃を王龔の吏とすることに助力している。したがって、劉注所引「汝南先賢傳」の「袁閔」は「袁閔」の誤りと判断される。『世說新語』には、言語篇第 1 条に、次のように出てくる。「邊文禮(邊讓)見袁奉高、失次序。奉高曰『昔堯聘許由、面無忤色。先生何爲顛倒衣裳』。文禮答曰『明府初臨、堯德未彰、是以賤民顛倒衣裳耳』」。

(9) 袁閔、字表高

「袁閔」が「袁閔」の誤りであろうことは、前注を参照されたい。なお、四部叢刊本、四庫全書本は「袁宏」に作る。また「表高」は、劉注②の「泰別傳」に「奉高」とあるので、明らかに「奉高」の誤りと判断される。四部叢刊本、四庫全書本はどちらも「奉高」に作る。

(10) 泰別傳曰

「(郭) 泰別傳」は『隋書』經籍志に著録されていない。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷四十三黃憲伝に、次のようにある。「郭林宗、少遊汝南、先過袁閔、不宿而退。進往從憲、累日方還。或以問林宗、林宗曰『奉高之器、譬諸汎濫、雖清而易挹。叔度汪汪、若千頃陂、澄之不清、淆之不濁、不可量也』」。なお前注も参照されたい。

上掲の「譬諸汎濫」は、もと「譬諸汎濫」に作っていた「汎」字を、王先謙集解所引の惠棟らの見解により、改めたものである。李賢の注には「爾雅曰『側出汎泉、正出濫泉』」とあるが、『爾雅』积水には「汎泉、穴出。穴出、仄出也」、郭璞注に「從旁出也」とある。なお、范曄『後漢書』列伝卷五十八郭太伝の李賢注には、「謝承書曰『(中略)太始至南州、過袁奉高、不宿而去。從叔度、累日不去。或以問太、太曰『奉高之器、譬之汎濫、雖清而易挹。叔度之器、汪汪若千頃之陂。澄之不清、擾之不濁、不可量也』」とある。

(11) 汜濫

「汜」字が「汎」字の誤りであろうことは、前注を参照されたい。

〈本文〉

4. 李元禮風格秀整、高自標持、欲以天下名教是非爲己任①。後進之士、有升其堂者、皆以爲登龍門②。

〈劉注〉

① ⁽¹⁾ 薛瑩後漢書曰

李膺、字元禮、潁川襄城人。⁽²⁾抗志清妙、有文武雋才。遷司隸校尉、爲黨事自殺。

② ⁽³⁾ 三秦記曰

龍門、一名河津。去長安九百里。水懸絕、龜魚之屬、莫能上。上則化爲龍矣。

〈劉注の訳注〉

① 薛瑩の『後漢書』にいう。

李膺は、字が元禮で、潁川襄城の人である。志高く清らかで、文と武のすぐれた才能があった。司隸校尉に進んだが、党錮の禍で自殺した。

② 『三秦記』にいう。

龍門は、別名を河津という。長安から九百里のところにある。激しい滝になっていて、龜や魚のたぐいも、上れないが、上れば竜と化すのである。

(1) 薛瑩後漢書曰

「薛瑩後漢書」は、『隋書』經籍志史部正史類に「後漢記 六十五卷 本一百卷、梁有、今殘缺。晉散騎常侍薛瑩撰」とある。

「薛瑩」は、本伝によれば三国呉で「左國史」に就いているが、「後漢記」を撰したという記事は見えない。『三國志』卷五十三呉書卷八薛綜伝に「薛綜、字敬文、沛郡竹邑人也。(中略)子珣、(中略)珣弟瑩、字道言、(中略)遂召瑩還、爲左國史。(中略)太康三年卒。著書八篇、名曰新議」。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十七党錮列伝李膺伝に、次のようにある。「李膺、字元禮、潁川襄城人也。(中略)膺性簡亢、無所交接、唯以同郡荀淑・陳寔爲師友。(中略)再遷、復拜司隸校尉。(中略)自此諸黃門常侍皆鞠躬屏氣、休

沐不敢復出宮省。帝怪問其故、並叩頭泣曰『畏李校尉』。(中略)後張儉事起、收捕鉤黨。鄉人謂膺曰『可去矣』。對曰『事不辭難、罪不逃刑、臣之節也。吾年已六十、死生有命。去將安之』。乃詣詔獄。考死」。ただし「抗志清妙、有文武儔才」という評は見当たらない。

また、『太平御覽』卷四四七所引「袁子正書」には、「李膺、言出于口、人莫得違也。有難李君之言者、則鄉黨非之。李君子與人同輿載、則名聞天下」とある。

(2) 抗志清妙

「抗志」は、志を高く持つこと。『文選』卷三十二所収「離騷」の「抑志而弭節兮、神高馳之邈邈」への王逸注に「言己雖乘雲龍、猶自抑案、弭節徐行、高抗志行、邈邈而遠、莫能逮及」、同卷三十三所収「九章」「涉江」の「世溷濁而莫余知兮、吾方高馳而不顧」への王逸注に「言時世貪亂、遭君蔽闇、無有知我之賢、然猶高行抗志、終不回曲也」とある。

「清妙」は、本篇第1条の注(4)参照。

(3) 三秦記曰

「三秦記」は、『隋書』經籍志に見当たらない。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十七党錮列伝李膺伝の李賢注に「龍門、河水所下之口、在今絳州龍門縣。辛氏三秦記曰『河津、一名龍門。水險不通、魚鼈之屬、莫能上。江海大魚、薄集龍門下數千、不得上。上則爲龍也』」。

〈本文〉

5. 李元禮嘗歎荀淑鍾皓曰①、荀君清識難尚、鍾君至德可師②。

〈劉注〉

① ⁽¹⁾先賢行狀曰、

荀淑、字季和、潁川潁陰人也。所拔⁽²⁾韋褐芻牧之中、執案刀筆之吏、皆爲英彥。⁽³⁾舉方正、⁽⁴⁾補朗陵侯相、所在流化。鍾皓、字季明、潁川長社人。父祖至德者名。⁽⁵⁾皓高風承世、除林慮長、不之官。⁽⁶⁾人位不足、天爵有餘。

② ⁽⁷⁾海內元賢傳曰、

潁川先輩、爲海內所師者、定陵陳鍾叔、潁陰荀淑、長社鍾皓。⁽⁸⁾少府李膺宗此三君、常言、荀君清識難尚、陳鍾至德可師。⁽⁹⁾

〈劉注の訳注〉

① 『先賢行狀』にいう。

荀淑は、字が季和で、潁川潁陰の人である。草刈や牛飼いたち、下級役人たちの中から抜擢した人々は、すべてすぐれた人材であった。方正の科に挙げられ、朗陵侯の相に任ぜられ、いく先々で人々を教化した。鍾皓は、字が季明で、潁川長社の人である。父祖はすぐれた徳を有し名声を博した。皓も父祖ゆずりの高い風格で、林慮の長に任ぜられたが、就任しなかった。人の世の官位は低かったが、天から授かった爵位（＝徳）は十分以上であった。

② 『海内先賢傳』にいう。

潁川の先人で、国の手本となるひとびとは、定陵の陳稚叔、潁陰の荀淑、長社の鍾皓である。少府の李膺はこの三君をとうとび、いつも言っていた。「荀君は、（その）清らかな見識になにもものも加え難く、陳・鍾は、（その）素晴らしい徳を手本にできる」。

(1) 先賢行狀曰

葉德輝氏は、「亦稱『潁川先賢行狀』、書鈔設官部十一引用」と記す。ただ、『隋書』經籍志に「潁川先賢行狀」、または「先賢行狀」と称する書は見当たらない。あるいは、史部雜伝類に「先賢集三卷」とあるのがそれか。『舊唐書』經籍志史錄雜伝類に、同一と見られる書が「海内先賢行狀三卷 李氏撰」と著録されているからである。

所引の文章に類似した一節は、荀淑については、范曄『後漢書』列伝卷五十二荀淑伝に「荀淑、字季和、潁川潁陰人也。荀卿十一世孫也。少有高行、博學而不好章句、多爲俗儒所非、而州里稱其知人。（中略）及梁太后臨朝、有日食地震之變、詔公卿舉賢良方正。光祿勳杜喬・少府房植舉淑對策、譏刺貴倖、爲大將軍梁冀所忌、出補朗陵侯相。莅事明理、稱爲神君。（中略）年六十七、建和三年卒」とある。さらに、『三國志』卷十魏書荀彧伝の裴松之注引「續漢書」に、「淑有高才、王暢・李膺皆以爲師。爲朗陵侯相、號稱神君」、同注引「張璠漢紀」に、「淑博學有高行、與李固・李膺同志友善。拔李昭於小吏、友黃叔度於幼童。以賢良方正徵、對策譏切梁氏、出補朗陵侯相、卒官」とある。劉注所引「先賢行狀」の「所拔韋褐芻牧之中、執案刀筆之吏、皆爲英彥」の部分が、「張璠漢紀」には「拔李昭於小吏、友黃叔度於幼童」と表現されていると考えられる。

鍾皓については、范曄『後漢書』列伝卷五十二鍾皓伝に「鍾皓、字季明、潁川長社人也。爲郡著姓、世善刑律。皓少以篤行稱。（中略）前後九辟公府、徵爲廷尉正、博士、林慮長、皆不就。（中略）年六十九、終於家」とある。さらに、『三國志』卷十三魏書卷十三鍾繇伝の裴松之注に、「先賢行狀曰、鍾皓、字季明。溫良篤慎、博學詩律。（中略）前

後九辟三府、遷南鄉・林慮長、不之官」とある。

(2) 韋褐芻牧之中

「韋褐芻牧」は、「韋」を帯とし「褐」をまとい「芻牧」を仕事とするような、貧賤の者たち。「韋」は、『漢書』卷五十一賈山伝所収「至言」に「夫布衣韋帶之士、修身於内、成名於外、而使後世不絶息」、顔師古注に「言貧賤之人也。韋帶、以單韋爲帶、無飾也」とある。「褐」は、『毛詩』豳風「七月」に「無衣無褐、何以卒歲」、鄭玄箋に「箋云、褐、毛布也。卒、終也。此二正之月、人之貴者、無衣。賤者、無褐。將何以終歲乎」とある。

「芻牧」は、『韓非子』説疑篇に「聖王明君則不然。(中略)觀其所舉、或在山林藪澤巖穴之間、或在圜圜蹢躅縲索之中、或在割烹芻牧飯牛之事。然明主不差其卑賤也、以其能爲・可以明法・便國利民、從而舉之、身安名尊」とある。

(3) 執案刀筆之吏

「執案刀筆之吏」は、下級の役人。ただし「執案」は、『世説新語』以前の現存文献に見出しがたい。「刀筆」は、『史記』卷五十三蕭相国世家に「太史公曰、蕭相国何、於秦時爲刀筆吏、錄錄未有奇節」、『文選』卷四十一所収李陵「答蘇武書」に「男兒生以不成名、死則葬蠻夷中、誰復能屈身稽顙、還向北闕、使刀筆之吏、弄其文墨邪?」とある。

(4) 英彦

すぐれた人物。『三国志』卷四十七吳書卷二吳主孫権伝の裴松之注に「吳録曰、(中略) (沈)友、字子正、吳郡人。年十一、華歆行風俗、見而異之、因呼曰『沈郎、可登車語乎?』。友逡巡却曰『君子講好、會宴以禮。今仁義陵遲、聖道漸壞。先生銜命、將以裨補先王之教、整齊風俗。而輕脫威儀、猶負薪救火、無乃更崇其熾乎?』。歆慚曰『自桓・靈以來、雖多英彦、未有幼童若此者』」、同卷五十七吳書卷十二虞翻伝の裴松之注にも「會稽典録曰、孫亮時、有山陰朱育、(中略)仕郡門下書佐。太守濮陽興正旦宴見掾吏、言次、問『(中略)欽聞國賢、思覩盛美、有日矣。書佐寧識之乎?』。育對曰『往過習之。昔初平末年、王府君以淵妙之才、超遷臨郡、思賢嘉善、樂采名俊、問功曹虞翻曰『(中略)功曹雅好博古、寧識其人邪?』翻對曰『(中略)河内太守上虞魏少英、遭世屯蹇、忘家憂國、列在八俊、爲世英彦。(後略)』」とある。

(5) 至德者名

三字目の「者」は「著」の誤りと判断される。四部叢刊本、四庫全書本は「著」に作る。

「至德」は、先行例では「中和之德」、「中和可常行之德」、「至極微妙之德」などと解釈されている。『易』繫辞伝上に「廣大配天地、變通配四時、陰陽之義配日月、易簡之善配至德。子曰『易、其至矣乎?』」、孔穎達の正義に「易簡之善配至德者、案初章論乾坤易

簡、可久可大、配至極微妙之德也」、『周禮』地官「師氏」に「師氏掌以嫗詔王、以三德教國子。一曰至德、以爲道本。二曰敏德、以爲行本。三曰孝德、以知逆惡」、鄭玄の注に「至德、中和之德、覆燾持載含容者也。孔子曰『中庸之爲德、其至矣』」、『論語』雍也篇に「子曰『中庸之爲德也、其至矣乎』」、何晏の注に「庸、常也。中和可常行之德也」とある。

(6) 人位不足、天爵有餘

『孟子』の「人爵」「天爵」を意識した言葉か。告子章句上に「孟子曰『有天爵者。有人爵者。仁義忠信、樂善不倦、此天爵也。公卿大夫、此人爵也。古之人、脩其天爵而人爵從之』」、趙岐注に「天爵、以德。人爵、以祿」とある。

(7) 海内元賢傳曰

三字目の「元」は「先」字がかすれたものかと判断される。「海内先賢傳」については、本篇第1条の注(2)参照。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十二鍾皓伝に「時皓及荀淑、並爲士大夫所歸慕。李膺常歎曰『荀君清識難尚、鍾君至德可師』」、また『三國志』卷十三魏書卷十三鍾繇伝の裴松之注に「先賢行狀曰、(中略)時郡中先輩爲海内所歸者、蒼梧太守定陵陳稚叔、故黎陽令潁陰荀淑及皓。少府李膺常宗此三人、曰『荀君清識難尚、陳・鍾至德可師』」とある。

(8) 陳鍾叔

二字目の「鍾」字は、「稚」字の誤りと判断される。四部叢刊本、四庫全書本は「穉」字に作る。

(9) 至德可師

「至德」は前注(5)参照。「可師」は、『後漢書』列伝卷三十九仲長統伝所収の「昌言」損益篇に「或曰『善爲政者、欲除煩去苛、并官省職、爲之以無爲、事之以無事。何子言之云云也?』。曰『若是、三代不足慕、聖人未可師也』」、また『文選』卷六十任昉「齊竟陵文宣王行狀」の李善注に「袁山松後漢書曰『李膺風格儀刑、皆可師範』」とある。

「至德」「可師」には『世說新語』以前の用例が見出せるのに対し、「清識」「難尚」には見出しがたい。

〈本文〉

6. 陳太丘詣荀朗陵、貧儉無僕役①。乃使元方將車②、季方持杖後從。長文尚小、載箬車中。既至、荀使叔慈應門、慈明行酒、餘六龍下食③。文若亦小、坐箬膝前。于時太史奏、

真人東行④。

〈劉注〉

① 陳寔傳曰、

寔、字仲弓、⁽²⁾潁川陳昌人。⁽³⁾爲間喜令・太丘長。風化宣流。

② 先賢行狀曰、

陳紀、字元方、寔長子也。至德絕俗、與寔高名並著、而弟諶又配之。每宰府辟召、⁽⁵⁾羔鴈成群。世號三君、⁽⁶⁾百城皆圖畫。⁽⁷⁾

③ 張璠漢紀曰、

淑有八子、儉・鯤・靖・燾・汪・爽・肅・敷。淑居西豪里。縣令苑康曰、⁽⁹⁾昔高陽氏有才子八人。遂署其里爲高陽里。時人號曰八龍。

④ 檀道鸞續晉陽秋曰、

陳仲弓從諸子姪、造荀父子。于時德星聚。太史奏、五百里賢人聚。

〈劉注の訳注〉

① 『陳寔傳』にいう。

寔は、字が仲弓で、潁川許昌の人である。間喜令・太丘長となり、その教化はあまねくゆきわたった。

② 『先賢行狀』にいう。

陳紀は、字が元方で、寔の長男である。すぐれた徳は世に比類なく、(父の) 寔とともに名高く、弟の諶もその仲間入りをしていた。お上に召しだされるたびに、贈物の羊や雁が山のようにであった。当時「三君」と呼ばれ、町々がすべてその肖像を画いた。

③ 張璠の『漢紀』にいう。

(荀) 淑には八人の息子がいた。儉・鯤・靖・燾・汪・爽・肅・敷である。淑は西豪里に住んでいたが、県令の范康が「いにしえ、高陽氏には才ある息子が八人いた」と、荀淑らの住む里に「高陽里」と名付けてしまった。当時の人々は「八竜」と呼んだ。

④ 檀道鸞の『續晉陽秋』にいう。

陳仲弓は、息子や甥たちをつれて、荀(淑) 父子を訪ねた。このとき、天に徳星が集まった。天文官は「五百里のうちに賢人が集まっております」と皇帝に申し上げた。

(1) 陳寔傳曰

「陳寔傳」は、隋志に著録がない。沈家本「世説注所引書目」は「文選求立太宰碑表

引陳寔別傳」と記す。『文選』卷三十八任昉「爲范始興作求立太宰碑表」の一節「君長一城、亦盡刊刻之美」に附された李善注に「陳寔別傳曰『寔卒、蔡邕爲立碑刻銘』」とある。

本文所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十二陳寔伝に「陳寔、字仲弓、潁川許人也。(中略)司空黃瓊辟選理劇、補聞喜長。旬月、以葦喪去官。復再遷除太丘長。修德清靜、百姓以安。鄰縣人戶歸附者、寔輒訓導譬解、發遣各令還本司官行部」とある。

劉注所引「陳寔傳」には、本貫を「潁川陳昌人」とする。「陳」字は、「許」字の誤りと判断される。四部叢刊本・四庫全書本はともに「許」字に作る。ところが、『後漢書』はさらに異なっていて、「潁川許昌人」ではなく、「潁川許人」に作る。王先謙の集解は、三国魏の黄初二年に「許縣」を「許昌縣」に改めているので、陳寔の当時は「許縣」であったはずだという。『三國志』卷二文帝紀に「(黄初)二年春正月、(中略)改許縣爲許昌縣」とある。

(2) 陳昌人

1字目の「陳」が「許」の誤りであることについては、前注を参照されたい。

(3) 聞喜令

1字目の「聞」は、「聞」字の誤りと判断される。四部叢刊本・四庫全書本は「聞」字に作る。

(4) 先賢行狀曰

「先賢行狀」については、本篇第5条の注(1)参照。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十二陳寔伝に「有六子、紀・諶最賢。紀、字元方、亦以至德稱。(中略)四府並命、無所屈就。遭父憂、每哀至、輒歐血絕氣。雖衰服已除、而積毀消瘠、殆將滅性。豫州刺史嘉其至行、表上尚書、圖象百城、以厲風俗。(中略)弟諶、字季方。與紀齊德同行、父子並著高名、時號三君。每宰府辟召、常同時旌命、羔鴈成羣、當世者靡不榮之」、李賢注に「古者、諸侯朝天子、卿執羔、大夫執鴈、士執雉。成羣、言衆多也」、「先賢行狀曰『豫州百城、皆圖書寔・紀・諶形像焉』」とある。

また、『古文苑』(四部叢刊本)卷十九所收邯鄲淳「後漢鴻臚陳君碑」に「君諱紀、字元方、太丘君之元子也。(中略)顯考、以茂行崇冠先儔。季弟、亦以英才知名當世。孝靈之初、並遭黨錮、俱處于家、號曰三君。(中略)豫州刺史嘉懿至德、命勅百城、圖畫形像。于今遺稱、越在民口」とある。

(5) 羔鴈成羣

「羔鴈」は、注(4)所引の李賢注によれば、諸侯が天子に朝見するときに、卿と大夫が

携える贈り物。ただし、『儀禮』士相見篇では、「羔」は上大夫相見の際の、「鴈」は下大夫相見の際の贈り物。『禮記』曲礼篇下には、「羔」は卿の贈り物、「鴈」は大夫の贈り物、とある。『儀禮』士相見篇に「下大夫、相見以鴈、飾之以布、維之以索、如執雉。上大夫、相見以羔、飾之以布」、『禮記』曲礼篇下に「凡摯、天子鬯、諸侯圭、卿羔、大夫鴈、士雉、庶人之摯匹」。

(6) 世號三君

陶淵明「集聖賢羣輔錄」上も、陳寔、陳紀、陳謚を「三君」と称す。「太丘長潁川陳寔、字仲弓。寔子大鴻臚紀、字元方。紀弟司空掾謚、字季方。右並以高名、號曰三君。見甄表狀及邯鄲淳紀碑」。ただし、德行篇第5条劉注所引「海内先賢傳」では、「定陵陳穉叔、潁陰荀淑、長社鍾皓」を、また品藻篇第1条劉注所引「謝沈漢書」では「竇武、劉淑、陳蕃」を、それぞれ「三君」と称している。

(7) 百城皆圖畫

「百城」について、吳金華『世說新語考釋』（安徽教育出版社 一九九四年）は、当時実際に豫州内に存した、県レベルの行政区画の数と見る。『後漢書』志卷二十郡国志二にある「右豫州刺史部。郡・國六、縣・邑・公・侯國九十九」を引いて、「“百城”、実指豫州的九十九城」と記している。

(8) 張璠漢紀曰

「張璠漢紀」は、『隋書』史部古史類に「後漢紀三十卷 張璠撰」とある。「張璠」は、東晋の秘書郎、著作郎。同経部易類に「周易八卷 晋著作郎張璠注、殘缺。梁有十卷」、「經典釋文序錄」に「張璠集解十二卷 安定人。東晋秘書郎、參著作」とある。興膳著の示教による。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十二荀淑伝に「有子八人、儉、緄、靖、燾、汪、爽、肅、專。並有名稱。時人謂八龍。初荀氏舊里名西豪、潁陰令勃海苑康以爲昔高陽氏有才子八人、今荀氏亦有八子、故改其里曰高陽里」、李賢注に「專、本或作敷」、『三國志』卷十魏書荀彧伝に「祖父淑、(中略)有子八人、號曰八龍」、裴注に「張璠漢紀曰、淑博學有高行、(中略)八子、儉、緄、靖、燾、洗、爽、肅、專。音敷。(中略)淑舊居西豪里、縣令苑康曰『昔高陽氏有才子八人』、署其里爲高陽里」、陶淵明「集聖賢羣輔錄」下にも類似の記述がある。

ただし、余嘉錫氏は、『史通』採撰篇の「荀氏家伝等に記された我が家自慢を、史家が実録として採用したのは、不見識である」とする見解に、さらに考証を加えて、「八龍」の中で実際に優れていたのは二人に過ぎず、ただ彼らの子孫が魏晋に高位に昇っているので喧伝された虚名である、と断じている。「觀諸書所述、八龍之中、慈明(荀爽)名最

著、叔慈（荀靖）次之。餘六龍碌碌、無所短長。足見純盜虛聲、原非實錄」、「而荀氏八龍、獨爲人所稱述、蓋以慈明位至三公、文若（荀彧）及其子孫、亦顯於魏晉故也」、「大較後漢人之以龍名者、惟孔明臥龍、管寧龍尾、斯爲不負。他皆虛美溢量、未可信以爲實也」。

(9) 昔高陽氏有才子八人

顓頊の子孫である蒼舒ら「八愷」のこと。『春秋左氏傳』文公十八年に「季文子使大史克對曰『（中略）昔高陽氏有才子八人。蒼舒、隤攷、檮戴、大臨、彤降、庭堅、仲容、叔達。齊聖廣淵、明允篤誠。天下之民、謂之八愷（後略）』」、杜預注に「高陽、帝顓頊之號。八人、其苗裔」とある。

(10) 檀道鸞續晉陽秋曰

「檀道鸞續晉陽秋」は、『隋書』經籍志史部古史類に「續晉陽秋二十卷 宋永嘉太守檀道鸞撰」とある。「檀道鸞」は、『宋書』卷九十四恩倖伝徐爰伝の、宋王朝開始の年を確定する議論を記述するくだりに「散騎常侍巴陵王休若・尚書金部郎檀道鸞二人、謂宜以元興三年爲始」、『南史』卷七十二文学伝檀超伝に「檀超、字悦祖、高平金鄉人也。（中略）超叔父道鸞、字萬安。位國子博士、永嘉太守。亦有文學、撰續晉陽秋二十卷」とある。

所引の文章に類似した一節は、『初學記』卷一星第四所引「檀道鸞續晉陽秋」に「陳仲弓從諸子姪造荀季和父子。于時德星聚。大史奏『五百里有賢人聚』」とある。

(11) 德星

瑞祥の星。『史記』卷十二孝武本紀に「有司言曰『陛下建漢家封禪、天其報德星云』、司馬貞の『史記索隱』に「今按、此紀唯止言德星、則德星、歲星也。歲星所在有福、故曰德星也」、また同卷二十七天官書に「天精而見景星。景星者、德星也。其狀無常、出於有道之國」、張守節『史記正義』に「景星、狀如半月、生於晦朔、助月爲明。見則人君有德明聖之慶也」。

〈本文〉

7. 客有問陳季方^①、足下家君太丘、有何功德、而荷天下重名。季方曰、吾家君、譬如桂樹生泰山之阿。上有萬仞之高、下有不測之深。上爲甘露所霑、下爲淵泉所潤。當斯之時、桂樹焉知泰山之高、淵泉之深。不知有功德與無也。

〈劉注〉

① ⁽¹⁾海內先賢傳曰

陳謚、字季方、寔少子也。⁽²⁾才識博達。⁽³⁾司空掾・公車徵、不就。

〈劉注の訳注〉

① 『海内先賢傳』にいう。

陳謚は、字が季方で、寔のすえ息子である。才能・識見があり、ものごとくにひろく通じていた。司空府の掾や公車司馬令として召されたが、就任しなかった。

(1) 海内先賢傳曰

「海内先賢傳」は、本篇第1条注(1)を参照。

所引の文章に類似した一節は、范曄『後漢書』列伝卷五十二陳寔伝に「有六子、紀・謚最賢。(中略)弟謚、字季方。與紀齊德同行、父子並著高名、時號三君」とある。

(2) 才識博達

「才識博達」は、才能・識見があり博学であること。

「才識」は、『世説新語』本文には見出せないが、注文には6例ある。政事篇第6条注引「晉諸公贊」に「(賈)充有才識、明達治體」、方正篇第12条注引「八王故事」に「(楊)濟(中略)、有才識、累遷太子太保」、識鑒篇第6条注引「晉陽秋」に「潘滔(中略)、有文學才識」、賞譽篇第34条注引「趙吳郡行狀」に「(趙)穆(中略)、才識通達」、賢媛篇第8条注引「晉諸公贊」に「(許)猛禮學儒博、加有才識」、同篇第11条「王隱晉書」に「韓氏有才識」。また、『三國志』本文には4例、裴松之注文には3例ある。

「博達」は、『世説新語』本文および、本条以外の注文に見出せない。『漢書』本文に1例、その卷七十陳湯伝に「陳湯、字子公、山陽瑕丘人也。少好書、博達善屬文」とある。『後漢書』本文に2例あり、うち列伝卷四十七劉瑜伝所収の劉瑜の「上書」には「今三公在位、皆博達道藝」とある。

(3) 司空掾・公車

「司空掾」は「司空」の下僚。『後漢書』志卷二十四百官志第一に「司空。公一人、(中略)屬長吏一人、千石。掾屬二十九人」とある。「公車」は、「衛尉」の役所に属する下僚で、「公車司馬令」のこと。『後漢書』志卷二十五百官志第二に「衛尉。卿一人、中二千石。(中略)公車司馬令一人、六百石。本注曰、掌宮南闕門、凡吏民上章、四方貢獻、及徵詣公車者」とあり、李賢注に「獻帝起居注曰、建安八年、議郎衛林爲公車司馬令、位隨將・大夫。舊公車令與都官長史、位從將・大夫、自林始」とある。

李賢注所引「獻帝起居注」に、建安年間に「公車」に就任した「衛林」のことが記されているが、同じ建安年間に、左伝学者の謝該も、仕官して「公車」に就いている。『後

漢書』列伝卷六十九下儒林列伝下に「謝該、字文儀、南陽章陵人也。善明春秋左氏、爲世名儒。(中略)仕爲公車司馬令、以父母老、託疾去官」とある。

〈本文〉

8. 陳元方子長文、有英才^①。與季方子孝先^②、各論其父功德、爭之不能決。咨於太丘。
太丘曰、元方難爲兄、季方難爲弟^③。

〈劉注〉

- ① ⁽¹⁾ 魏書曰、
陳羣、字長文。祖寔嘗謂宗人曰、此兒、必興吾宗。及長、有識度⁽²⁾。其所善、皆父黨。
② ⁽³⁾ 陳氏譜曰、
諡子忠、字孝先。州辟不就。
③ 一作、元方難爲弟、季方難爲兄。⁽⁴⁾

〈劉注の訳注〉

- ① 『魏書』にいう。
陳羣は、字が長文である。祖父の寔はいつも一族のものに言っていた。「この子はきっと、わが一族を榮えさせるだろう」。成長すると、人柄を見抜く度量を持つようになった。よしみを結ぶ相手は、すべて父の同志であった。
② 『陳氏譜』にいう。
諡の子の忠は、字が孝先である。州の役所が官吏として召しだしたが、就任しなかった。
③ 別のテキストは「元方 弟爲り難く、季方 兄爲り難し」に作る。

(1) 魏書曰

「魏書」は、『隋書』史部正史類に「魏書四十八卷 晉司空王沈撰」とある。「王沈」は、魏末晋初の人で、阮籍らとともに『魏書』を編纂したが、「時諱」が多く陳寿の『三國志』に及ばない、と評されている。『晉書』卷三十九王沈伝に「王沈、字處道、太原晉陽人也。(中略)正元中、遷散騎常侍・侍中、典著作。與荀顗・阮籍共撰魏書、多爲時諱、未若陳壽之實錄也。(中略)泰始二年、薨」。

また、『太平御覽』卷二三三所引「王隱晉書」には「王沈爲秘書監、著魏書。多爲時諱、

而善序事」とある。『宋書』卷十一律志や同卷三十の五行志には、王沈の魏書には、律志や五行志にあたる篇がない、と指摘されている。

所引の文章に類似した一節は、陳寿『三國志』卷二十二魏書陳羣伝に「陳羣、字長文、潁川許昌人也。祖父寔、父紀、叔父諶、皆有盛名。羣爲兒時、寔常奇異之、謂宗人父老曰『此兒必興吾宗』（中略）羣薦廣陵陳矯・丹陽戴乾、太祖皆用之。後吳人叛、乾忠義死難、矯遂爲名臣、世以羣爲知人」とある。

(2) 有識度

「識度」は、前注(1)所引『三國志』の後半部分にあるように、識見、ここでは相手の人柄を見抜く度量のこと。『世説新語』本文にはほかに2例ある。徳行篇第12条に「王朗每以識度推華歆」、賢媛篇第11条に「(山濤)妻曰『君才殊不如、正當以識度相友耳』。公曰『伊輩亦常以我度爲勝』」。注文には、輕詆篇第4条に「案、王公（導）雅量通濟、庾亮之在武昌、傳其應下。公以識度裁之、囂言自息」。『三國志』には1例、卷二十七の「評曰」に「王昶、開濟識度」とある。

(3) 陳氏譜曰

「陳氏譜」は『隋書』經籍志に著録がない。また、范曄『後漢書』、陳寿『三國志』には、陳忠の記載が見出せない。

(4) 元方難爲弟、季方難爲兄

本文も「一作」も、甲乙つけがたいことをいう。楊勇著九頁に周一良『世説新語札記』を引用しつつ、そもそもは『論語』子路篇に基づくとする。「勇按：難兄難弟、蓋語本論語子路。子曰『魯・衛之政、兄弟也』。言其政相似不相高下也」。

〈本文〉

9. 荀巨伯遠看友人疾^①、值胡賊攻郡。友人語巨伯曰、吾今死矣。子可去。巨伯曰、遠來相視、子令吾去。敗義以求生、豈荀巨伯所行耶。賊既至、謂巨伯曰、大軍至、一郡盡空。汝何男子、而敢獨止。巨伯曰、友人有疾、不忍委之。寧以我身代友人命。賊相謂曰、我輩無義之人、而入有義之國。遂班軍而還。一郡並獲全。

〈劉注〉

- ① ⁽¹⁾荀氏家傳曰、

巨伯、漢桓帝時人也。亦出潁川、未詳其始末。

〈劉注の訳注〉

① 『荀氏家傳』にいう。

巨伯は、漢の桓帝の時代の人である。彼も潁川の出身であるが、その生涯は分らない。

(1) 荀氏家傳曰

「荀氏家傳」は『隋書』經籍志に著録がない。『舊唐書』卷四十六經籍志上乙部史錄譜牒類に「荀氏家傳十卷 荀伯子撰」とある。荀伯子については、『宋書』卷六十荀伯子伝に、「晉史」や「桓玄傳」の編纂に携わった史官であること、家柄自慢をしていたこと、などの逸事が記されている。「荀伯子、潁川潁陰人也。祖羨、驃騎將軍。父猗、秘書郎。（中略）著作郎徐度重其才學、舉伯子及王韶之、並爲佐郎、助撰晉史及著桓玄等傳。（中略）伯子常自矜廕藉之美、謂（王）弘曰『天下膏粱、唯使君與下官耳。宣明之徒、不足數也』」。荀巨伯については未詳。

〈本文〉

10. 華歆遇子弟、甚整。雖閒室之内、嚴若朝典①。陳元方兄弟恣柔愛之道。而二門之裏、兩不失雍熙之軌焉。

〈劉注〉

① ⁽¹⁾ 魏志曰、

歆、字子魚、平原高唐人。

⁽²⁾ 魏略曰、

靈帝時、與北海邴原・管寧、俱遊學相善。時號三人爲一龍。謂歆爲龍頭、寧爲龍腹、原爲龍尾。

〈劉注の訳注〉

① 『魏志』にいう。

（華）歆は、字が子魚で、平原高唐の人である。

『魏略』にいう。

靈帝の時代に、北海の邴原や管寧と、ともに異郷に学び仲が良かった。当時、三人を一頭の竜と呼んだ。歆が竜の頭であり、寧が竜の腹であり、原が竜の尾だということであった。

(1) 魏志曰

「魏志」は『三國志』魏書のことか。葉德輝氏が「按、即三國志之一」と判断している。『隋書』經籍志史部正史類に「三國志六十五卷 錄一卷 晉太子中庶子陳壽撰 宋太中大夫裴松之注」。「陳壽」は、『晉書』卷八十二陳寿伝に「陳壽、字承祚、巴西安漢人也。

(中略)除著作郎、領本郡中正、撰魏吳蜀三國志、凡六十五篇。(中略)元康七年、病卒。時年六十五」。

所引の文章に類似した一節は、『三國志』卷十三魏書華歆伝に「華歆、字子魚、平原高唐人也」。

(2) 魏略曰

「魏略」は、『隋書』經籍志に著録がない。『舊唐書』經籍志乙部史録正史類に「魏略三十八卷 魚豢撰」。『隋書』經籍志史部雜史類には「典略 八十九卷 魏郎中魚豢撰」とある。興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』299 頁は「典略と魏略は本来一体の書であり、舊唐書はそれを二箇所に分割して著録したものと思われる。」とする。本篇第2条の注(2)を参照されたい。

所引の文章に類似した一節は、『三國志』卷十三魏書華歆伝裴注に「魏略曰、歆與北海邴原・管寧俱游學、三人相善、時人號三人爲一龍。歆爲龍頭、原爲龍腹、寧爲龍尾。臣松之以爲邴根矩之微猷懿望、不必有愧華公。管幼安含德高蹈、又恐弗當爲尾。魏略此言、未可以定其先後也」。

〈本文〉

- 1 1. 管寧・華歆共園中鋤菜①。見地有片金。管揮鋤、與瓦石不異。華捉而擲去之。又嘗同席讀書、有乘軒冕過門者。寧讀如故、歆廢書出看。寧割席分坐曰、子非吾友也。②

〈劉注〉

- ① 傳子曰、

寧、字幼安、北海朱虛人。齊相管仲之後也。

- ② 魏略曰、

寧少恬靜、常笑邴原・華子魚有仕宦意。及歆爲司徒、上書讓寧。寧聞之笑曰、子魚本欲作老吏、故榮之耳。

〈劉注の訳注〉

① 『傳子』にいう。

（管）寧は、字が幼安で、北海朱虛の人である。齊の宰相であった管仲の子孫である。

② 『魏略』にいう。

寧は、若いころからもの静かで無欲であり、邴原や華子魚（華歆）に仕官したい気持ちがあることを笑っていた。歆が司徒になると、上書して寧に位を譲ろうとした。寧はそれを聞き笑って言った。「子魚は前からお役人になりたがっていたから、（司徒の位を）榮譽だと思うのだ」。

(1) 傳子曰

「傳子」は、『隋書』経籍志子部雑家に「傳子百二十卷 晉司隸校尉傅玄撰」。傅玄は『晉書』卷四十七傅玄伝に「傅玄、字休奕、北地泥陽人也。（中略）尋卒於家、時年六十二、諡曰剛」。

所引の文章に類似した一節は、『三國志』卷十一魏書管寧伝に「管寧、字幼安、北海朱虛人也」、その裴松之注に「傳子曰、齊相管仲之後也。昔田氏有齊、而管氏去之、或適魯、或適楚。漢興、有管少卿爲燕令、始家朱虛。世有名節、九世而生寧」とある。

(2) 魏略曰

「魏略」については、本篇第 10 条注 (2) 参照。

所引の文章に類似した一節は、『三國志』卷十一魏書管寧伝裴注に「傳子曰、（中略）邴原性剛直、清議以格物、度已下心不安之。寧謂原曰『潛龍以不見成德』。言非其時、皆招禍之道也。密遣令西還」、また同伝に「黃初四年、詔公卿舉獨行君子、司徒華歆薦寧。

（中略）明帝即位、太尉華歆遜位讓寧、（中略）寧稱草莽臣上疏曰「（中略）又年疾日侵、有加無損、不任扶輿進路以塞元責。（中略）乞蒙哀省、抑恩聽放、無令骸骨填於衢路」。

(3) 寧少恬靜

「恬靜」は、外物に動かされず、静かで無欲であること。『文選』卷三十四所収曹植「七啓」に「玄微子曰『予樂恬靜、未暇此觀也』」、『三國志』卷二十一王粲伝裴注に「喜爲康傳曰、（中略）長而好老莊之業、恬靜無欲」とある。「恬」は、老莊の書にあらわれる語で、『老子』優武第 31 章に「恬淡爲上」、その河上公注に「不貪土地利人財寶」、『莊子』外篇繕性篇には「古之治道者、以恬養知」、その郭象注に「恬靜而後知不蕩、知不蕩而性不失也」とある。

〈本文〉

- 1 2. 王朗每以識度推華歆^①。歆蜡日^②、嘗集子姪燕飲。王亦學之。有人向張華說此事。張曰、王之學華、皆是形骸之外、去之所以更遠^③。

〈劉注〉

- ① ⁽¹⁾ 魏書曰、

朗、字景興、東海郟人。魏司徒。

- ② ⁽²⁾ 禮記曰、

天子大蜡、八。伊耆氏始爲蜡。蜡、索也。歲十二月、合聚萬物、而索饗之。

- ⁽³⁾ 五經要義曰、

三代名臘、夏曰嘉平、殷曰清祀、周曰大蜡。摠謂之臘。

- ⁽⁴⁾ 晉博士張亮議曰、

蜡者、合聚百物、索饗之、歲終休老息民也。臘者、祭宗廟五祀⁽⁵⁾。傳曰、臘、接也。祭則新故交接也。秦漢已來、臘之明日爲初歲。古之遺語也。

- ③ ⁽⁶⁾ 王隱晉書曰、

張華、字茂先、范陽人也。累遷司空、而爲趙王倫所害。

〈劉注の訳注〉

- ① 『魏書』にいう。

朗は、字が景興で、東海郟の人である。魏の司徒である。

- ② 『禮記』にいう。

天子の大蜡の祭祀は、八神をまつる。伊耆氏が最初に「蜡」とした。蜡とは、索（もと）めるということである。十二月に、萬物を集めて、神を索めて捧げものをする。

『五經要義』にいう。

三代に「臘」を名付けて、夏には「嘉平」といい、殷には「清祀」といい、周には「大蜡」といった。総称して「臘」というのである。

晋の博士の張亮が奏議して言った。

蜡とは、多くのものを集めて、神を求めささげものをする事で、一年の終わりに、老いた者を休ませ民を憩わせるのです。臘とは、宗廟と五祀（門・戸・中霤・竈・行の五柱の神への祭祀）の祭祀です。伝に「臘とは、接である」とあります。祭には（歳の）新旧が交わり接します。秦漢以来、臘の次の日が初歳となっています。古くからの言い伝えです。

③ 王隱の『晉書』にいう。

張華は、字が茂先で、范陽の人である。出世を重ねて司空に進んだが、趙王倫に殺害された。

(1) 魏書曰

「魏書」は、本篇第8条注(1)参照。

所引の文章に類似した一節は、『三國志』卷十三魏書王朗伝に「王朗、字景興、東海郟人也。(中略)明帝即位、進封蘭陵侯、(中略)轉爲司徒。(中略)太和二年薨、諡曰成侯」。

(2) 禮記曰

「禮記」は、『隋書』經籍志經部礼類に「禮記二十卷 漢九江太守戴聖撰、鄭玄注」、「禮記十卷 漢北中郎將盧植注」「禮記三十卷 王肅注。梁有禮記十二卷、業遵注、亡」。戴聖は、『漢書』卷八十八儒林伝に「漢興、(中略)而瑕丘蕭奮以禮至淮陽太守。(中略)孟卿、東海人也、事蕭奮、以授后倉。(中略)(倉)授沛聞人通漢子方・梁戴德延君・戴聖次君、沛慶普孝公。(中略)聖號小戴、以博士論石渠、至九江太守」、『經典釋文』卷一序録に「陳邵(字節良、下邳人、晉司空長史)『周禮論序』云、戴德刪古禮二百四篇爲八十五篇、謂之大戴禮。戴聖刪大戴禮爲四十九篇、是爲小戴禮。後漢馬融・盧植考諸家同異、附戴聖篇章、去其繁重及所叙略、而行於世。即今之禮記、是也。鄭玄亦依盧馬之本、而注焉」。

所引の文章に類似した一節は、『禮記』郊特牲篇に「天子大蜡八(鄭玄注：所祭有八神也)。伊耆氏始爲蜡(同：伊耆氏、古天子號也)。蜡也者、索也(同：謂求索也)。歲十二月、合聚萬物而索饗之也」とある。

(3) 五經要義曰

「五經要義」は、『隋書』經籍志經部論語類に「五經要義五卷 梁十七卷、雷氏撰」。「雷氏」は不明。

所引の文章に類似した一節として、楊勇氏は『禮記』礼運篇の「昔者、仲尼與於蜡賓」に対する陸德明の釈文「祭名、夏曰清祀、殷曰嘉平、周曰蜡、秦曰蠟」を引き、「兩說稍異」とする。「三代臘名」が、劉注所引「五經要義」とは、夏と殷とで逆になっている。

『風俗通義』卷八には「謹按、禮傳、夏曰嘉平、殷曰清祀、周曰大蜡、漢改爲蠟」とあって、劉注所引「五經要義」に一致する。『北堂書鈔』卷一五五は「風俗通」に依拠して「夏曰嘉平、殷曰清祀」とし、『初學記』卷四や『藝文類聚』卷五も「風俗通」を引用する。だが、杜佑『通典』に至ると、その卷四十四に「夏后氏更名曰嘉平、殷更名曰清祀」と記しつつも「據廣雅、則夏曰清祀、殷曰嘉平。今、按風俗通及蔡邕章句耳。未詳孰是」

と、断定を避ける。王念孫『廣雅疏證』卷九「釋天」には「夏曰清祀、殷曰嘉平」と記す。以上は、東北大学東洋史の三田辰彦氏の示教による。

(4) 晉博士張亮議曰

「晉博士張亮」の閏歴等は不明。余嘉錫氏の引く程炎震氏は、『藝文類聚』卷五および『太平御覽』卷三十三所収の張亮の「議」を引用している。前者の「歳時部 臘」には「晉博士張亮議曰、臘、接也。祭宜在新故交接也。俗謂之臘之明日爲初歳、秦漢以來有賀、此皆古之遺語也」、後者の「時序部 臘」には「又博士張亮議曰、臘、接也。登宜在新故交接也。俗謂之臘之明日爲初歳。秦漢以來有賀、此皆古之遺語」。

劉注所引「張亮議」が基づく一節は、前々注所引『禮記』郊特牲篇と、同月令篇の「孟冬之月、(中略)天子乃祈來年于天宗、大割、祠于公社及門閭、臘先祖五祀、勞農以休息之」(ただし『呂氏春秋』孟冬紀には「天子乃祈來年于天宗、大割、祠于公社及門閭、饗禱祖五祀、勞農夫以休息之」に作る)、および前注所引『風俗通議』卷八の一節にすぐ続く「或曰、臘、接也。新故交接、故大祭以報功也」である。

(5) 五祀

門、戸、中霤(家の中央)、竈(かまど)、行(通り道)の五柱の神をまつる祭祀。前注所引『禮記』月令篇を参照されたい。その鄭玄注に「五祀、門・戸・中霤・竈・行也」とある。

(6) 王隱晉書曰

『隋書』經籍志史部正史類に「晉書八十六卷 本九十三卷、今殘缺。晉著作郎王隱撰」とある。「王隱」は、『晉書』卷八十二王隱伝に「王隱、字處叔、陳郡陳人也。世寒素。父銓、歷陽令、少好學、有著述之志、每私錄晉事及功臣行狀、未就而卒。(中略)太興初、典章稍備、乃召隱及郭璞俱爲著作郎、令撰晉史。(中略)書遂不就、乃依征西將軍庾亮于武昌。亮供其紙筆、書乃得成、詣闕上之。隱雖好著述、而文辭鄙拙、蕪舛不倫。其書次第可觀者、皆其父所撰。文體混漫義不可解者、隱之作也。年七十餘、卒於家」。また、『初學記』卷二十一「墨」所引「蕭方等三十國春秋」には、「王隱始成晉書、合八十八卷。家貧无紙、未成其志。遂南遊、投陶侃於荊州、又江州投庾亮、乃獲其紙墨、始書就焉」とある。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十六張華伝に「張華、字茂先、范陽方城人也。(中略)代下邳王晃爲司空、領著作。(中略)及(司馬)倫・(孫)秀將廢賈后、(中略)遂害之於前殿馬道南、夷三族、朝野莫不悲痛之。時年六十九」。

〈本文〉

- 1 3. 華歆・王朗俱乗船避難。有一人欲依附。歆輒難之。朗曰、幸尚寬、何爲不可。後賊追至、王欲舍所攜人。歆曰、本所以疑、正爲此耳。既已納其自託、寧可以急相棄邪。遂攜拯如初。世以此定華王之優劣①。

〈劉注〉

- ① 華⁽¹⁾嶠譜叙曰、

歆爲下邳令。漢室方亂、乃與同志士⁽²⁾鄭太等六七人、避世。自武關出、道遇一丈夫獨行、願得與俱。皆哀許之、歆獨曰、不可。今在危險中、禍福患害、義猶一也。今無故受之、不知其義。⁽³⁾若有進退、可中棄乎。衆不忍、卒與俱行。此丈夫中道墮井。皆欲棄之、歆乃曰、已與俱矣、棄之不義。卒共還、出之而後別。

〈劉注の訳注〉

- ① 華嶠の『譜叙』にいう。

歆は下邳の令となった。おりしも漢王朝は混乱のさなかだったので、志を同じくする鄭太ら六・七人と、世を避けた。武関から出て、途中、一人旅の男に出会い、(男は)道連れにしてほしいと頼んだ。みなが同情して許したが、歆だけは言った。「いけない。今は危険のただなかにあり、よいことも悪いことも、道義としてみな同じように(引き受けることに)なる。今、ちゃんとしたわけもなく受け入れるのは、その道義が分かっていないからだ。不測の事態があっても、途中で棄てられようか」。みなは忍びず、同行することとなった。この男が途中で井戸に落ちた。みなが見棄てようとしたけれども、歆は言った。「同行しているからには、見棄てるのは道義に合わない」。とうとう一緒にひきかえして、井戸から出してやってから別れた。

- (1) 華嶠譜叙曰

「華嶠譜叙」あるいは「華嶠譜」は、『隋書』經籍志に著録がない。

所引の文章に類似した一節は、『三國志』卷十三魏書華歆伝に、「董卓遷天子長安。歆求出爲下邳令、病不行、遂從藍田至南陽」とあり、その裴松之注引「華嶠譜叙」に、「歆少以高行顯名。避西京之亂、與同志鄭泰等六七人、間步出武關。道遇一丈夫獨行、願得俱。皆哀欲許之。歆獨曰『不可。今已在危險之中、禍福患害、義猶一也。無故受人、不知其義。既以受之、若有進退、可中棄乎』。衆不忍、卒與俱行。此丈夫中道墮井、皆欲棄之。歆曰『已與俱矣、棄之不義』。相率共還出之、而後別去。衆乃大義之」とある。

(2) 鄭太

『後漢書』列伝卷六十鄭太伝に、「鄭太、字公業、河南開封人。(中略)卓既遷都長安、天下飢亂、士大夫多不得其命。而公業家有餘資、日引賓客、高會倡樂、所贍救者甚衆。乃與何顓・荀攸共謀殺卓。事洩、顓等被執。公業脫身、自武關走、東歸袁術。術上以爲楊州刺史。未至官、道卒、年四十一」とある。

(3) 若有進退

「進退」は、事態の変化を意味し、ここでは不測の事態のこと。『易経』から出ていると、呉金華『世説新語考釋』（安徽教育出版社 一九九四年）「進退」が指摘する。『易』繫辭伝上に「吉凶者、失得之象也。悔吝者、憂虞之象也。變化者、進退之象也。剛柔者、晝夜之象也」とある。呉氏はさらに、「魏晉口語」では往々不利な状況を喩える、として、「王羲之雜帖」の用法を2例挙げ、「病情不穩、難以控制」の状態を指すとする。『法書要録』卷十所収王羲之「十七帖」には、次のようにある。「知、道長不孤得散力、疾重、而邇進退。甚令人憂念。遲信還知問」、「安復後問不。(中略)小妹亦故進退、不孤得散力、煩不得眠、食至少、疾患經日」。

〈本文〉

- 1 4. 王祥事後母朱夫人、甚謹^①。家有一李樹、結子殊好。母恒使守之。時風雨忽至、祥抱樹而泣^②。祥嘗在別牀眠、母自往闔斫之。值祥私起、空斫得被。既還、知母憾之不已、因跪前請死。母於是感悟、愛之如己子^③。

〈劉注〉

- ⁽¹⁾
① 晉諸公贊曰、

祥、字休徵、琅邪臨沂人。

- ⁽²⁾
祥世家曰、

祥父融、娶高平薛氏、生祥。繼室以廬江朱氏、生覽。

- ⁽³⁾
晉陽秋曰、

後母數譖祥、屢以非理使祥。弟覽輒與祥俱。又虐使祥婦、覽妻亦趨而共之。母患。方盛寒冰凍、母欲生魚。祥解衣、將剖冰求之、會有處冰小解、魚出。

- ⁽⁴⁾
蕭廣濟孝子傳曰、

祥後母、忽欲黃雀炙。祥念難卒致、須臾、有數十黃雀飛入其幕。母之所須、必自奔走、無不得焉。其誠至如此。

② ⁽⁵⁾蕭廣濟孝子傳曰、

祥後母、庭中有李。始結子、使祥晝視鳥雀、夜則趨鼠。一夜、風雨大至。祥抱泣至曉。母見之惻然。

③ ⁽⁶⁾虞預晉書曰、

祥以後母故、⁽⁷⁾陵遲不仕。年向六十、刺史呂虔檄爲別駕。時人歌之曰、⁽⁸⁾海沂之康。寔賴王祥。邦國不空。別駕之功。累遷太保。

〈劉注の訳注〉

① 『晉諸公贊』にいう。

(王) 祥は、字が休徵で、琅邪臨沂の人である。

『(王) 祥世家』にいう。

祥の父の融は、高平の薛氏をめとり、祥をもうけた。後妻として廬江の朱氏をめとり、覽をもうけた。

『晉陽秋』にいう。

ままた母は何度も(王) 祥を讒言し、またしばしば道理に合わない仕事で祥を使役した。弟の覽はそのたびに祥と行動をともにした。(ままた母は) さらに祥の妻を酷使したが、覽の妻も(そのたびに祥の妻のもとに) 走って、同じ仕事をした。ままた母が病気になる。ちょうど酷寒で氷が張っていたが、ままた母は生きのよい魚を食べたがった。祥が衣を脱ぎ、氷を割って(魚を) 手に入れようとする、たまたま氷が少し融けた所から、魚が飛び出した。

蕭廣濟の『孝子傳』にいう。

(王) 祥のままた母は、ふとスズメのあぶり焼きが食べなくなった。祥が手に入れ難かろうと思っていると、たちまち数十羽のスズメが、帳の中に飛び込んできた。母の欲しがるものは、必ず奔走し、手に入れないものはなかったのである。その徹底した誠実さはこのようであった。

② 蕭廣濟の『孝子傳』にいう。

(王) 祥のままた母は、庭にスモモの木を持っていた。実がなり始めると、祥に、屋にはスズメなどの鳥を見張らせ、夜にはネズミを追わせた。ある夜、激しい風雨となった。祥は(木を) 抱きかかえて泣いて夜を明かした。母はそれを見てあわれに思った。

③ 虞預の『晉書』にいう。

(王) 祥はままた母のために、ぐずぐずと出仕せずにいた。六十に手が届こうという時に、刺史の呂虔が呼び出し状で別駕とした。当時の人々は次のように歌った。「海沂(徐

州)の安泰、まことに王祥のおかげ。おくにがからっぽでないのは、別駕のお手柄」。出世を重ねて太保に進んだ。

(1) 晉諸公贊曰

「晉諸公贊」は、『隋書』経籍志史部雜史類に「晉諸公讃二十一卷 晉祕書監傅暢撰」とある。「傅暢」は、『三國志』卷二十一傅嘏伝に「傅嘏、字蘭石、北地泥陽人」、裴松之注に「晉諸公贊曰、祗、字子莊、嘏少子也。(中略)祗子宣、(中略)宣弟暢、字世道。祕書丞、沒在胡中。著晉諸公贊及晉公卿禮秩故事」、『晉書』卷四十七傅玄伝に「(傅)暢、字世道。(中略)作晉諸公讃叙二十二卷、又爲公卿故事九卷。咸和五年卒」。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十三王祥伝に「王祥、字休徵、琅邪臨沂人」。

(2) 祥世家曰

「祥世家」あるいは「王祥世家」は、『隋書』に著録がない。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十三王祥伝に「父融、公府辟不就。祥性至孝。早喪親、繼母朱氏不慈。(中略)漢末遭亂、扶母攜弟覽、避地廬江。(中略)覽、字玄通。母朱」。

(3) 晉陽秋曰

「晉陽秋」は、『隋書』経籍志史部古史類に「晉陽秋三十二卷 訖哀帝。孫盛撰」と著録がある。「晉陽秋」は、『晉書』によれば、数奇な運命をたどった書で、初版と改竄版との二種類がある。劉注の用いたテキストがどちらなのかは不明である。『晉書』卷八十二孫盛伝に「孫盛、字安國、太原中都人。(中略)年七十二卒。(中略)著魏氏春秋・晉陽秋、并造詩賦論難復數十篇。晉陽秋詞直而理正、咸稱良史焉。既而桓温見之、怒謂盛子曰『枋頭誠爲失利、何至乃如尊君所說。若此史遂行、自是關君門戶事』。其子遽拜謝、謂『請刪改之』。時盛年老還家、性方嚴有軌憲、雖子孫班白、而庭訓愈峻。至此、諸子乃共號泣稽顙、請爲百口切計。盛大怒。諸子遂爾改之。盛寫兩定本、寄於慕容雋。太元中、孝武帝博求異聞、始於遼東得之。以相考校、多有不同。書遂兩存」。

『初學記』卷十二「祕書監」所収「何法盛晉中興書」にも、「孫盛、自(「字」の誤り)安國。爲祕書監、加給事中。篤尚好學、自少及長、常手不釋卷。既居史官、乃著三國陽秋・典文字見典圖書注」とある。「晉陽秋」に対する当時の評価としては、『三國志』卷二十二魏書陳泰伝への裴松之注が、登場人物の言葉を恣意的に改変している、と非難している。「臣松之案本傳、泰不爲太常、未詳干寶所由知之。孫盛改易泰言、雖爲小勝、然檢盛言諸所改易、皆非別有異聞、率更自以意制、多不如舊。凡記言之體、當使若出其口。辭勝而違實、固君子所不取。況復不勝而徒長虛妄哉」。これに対し、『文心雕龍』史伝篇

は、核心を簡潔につかんでいる、という。「孫盛陽秋、以約舉爲能」。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十三王祥伝に「繼母朱氏不慈、數譖之。由是失愛於父。(中略)母常欲生魚時、天寒冰凍、祥解衣將剖冰求之。冰忽自解、雙鯉躍出、持之而歸。(中略)朱屢以非理使祥、覽輒與祥俱。又虐使祥妻、覽妻亦趨而共之。朱患之、乃止」。

また、『三國志』卷十八魏書呂虔伝の裴松之注引「孫盛雜語」に、「祥字、休徵。性至孝、後母苛虐、每欲危害祥、祥色養無怠。盛寒之月、後母曰『吾思食生魚』。祥脫衣、將剖冰求之、有少、堅冰解、下有魚躍出。因奉以供。時人以爲孝感之所致也。供養三十餘年、母終乃仕、以淳誠貞粹見重於時」、『北堂書鈔』卷一五八所引「臧榮緒晉書」に、「王祥後母朱氏不慈、而祥愈恭。思魚。于時盛寒、河海堅冰。旦旦冒厲風、于崖伺魚。一朝忽開小穴、有雙鯉俱出。祥取以奉母」、『初學記』卷三「冬」所引「師覺孝子傳」に「王祥少有德行、失母。後母憎而譖之。祥孝彌謹。盛寒河冰、網罟不施。母欲得生魚。祥解褐、叩冰求之。忽冰少開、有雙鯉出游。祥垂綸而獲之。于時人謂至孝所致也」、同卷七「冰」所引「臧榮緒晉書」に「王祥、字休徵。後母朱氏、思生魚。于時河水冰堅、祥朝朝冒厲風、於涯伺魚。一朝忽冰開小穴、有雙鯉跳出」、『藝文類聚』卷九所引「孫盛雜語」に「王祥、字休徵。性至孝、後母苛虐、欲危害祥。祥色養無怠。盛寒之月、後母曰『吾思生魚』。祥脫衣、將剖冰求之。有少處冰解、下有魚出。因以奉養」とある。

(4) 蕭廣濟孝子傳曰

「蕭廣濟孝子傳」は、『隋書』經籍志史部雜傳類に「孝子傳十五卷 晉輔國將軍蕭廣濟撰」、「蕭廣濟」は、不明。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十三王祥伝に「母又思黃雀炙、復有黃雀數十飛入其幕、復以供母。鄉里驚歎、以爲孝感所致焉」。

(5) 蕭廣濟孝子傳曰

「蕭廣濟孝子傳」については、前注参照。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十三王祥伝に「有丹柰結實、母命守之。每風雨、祥輒抱樹而立。其篤孝純至如此」。

(6) 虞預晉書曰

「虞預晉書」は、『隋書』經籍志史部正史類に「晉書二十六卷 本四十四卷、訖明帝。今殘缺。晉散騎常侍虞預撰」、「虞預」は、『晉書』卷九十一儒林伝に「虞喜、字仲寧、會稽餘姚人、(中略)弟豫自有傳」、卷八十二虞預伝に「虞預、字叔寧、徵士喜之弟也。(中略)(蘇)峻平、進爵平康縣侯、(中略)仍領著作。以年老歸、卒于家」。

また、『北堂書鈔』卷六十九所引「晉中興書會稽虞錄」には「虞預、字叔寧、好學有文

才、中宗以爲記室」、同卷七十一所引「晉中興書會稽虞錄」には「虞預有學有才、轉琅邪王國常侍」とある。

さらに『晉書』卷八十二王隱伝は、「虞預晉書」の中原の記述について、王隱の『晉書』を剽窃したものとする。「時著作郎虞預私撰晉書、而生長東南、不知中朝事。數訪於隱、并借隱所著書竊寫之」。

所引の文章に類似した一節は、『晉書』卷三十三王祥伝に「漢末遭亂、扶母攜弟覽避地廬江、隱居三十餘年、不應州郡之命。母終、居喪毀瘠、杖而後起。徐州刺史呂虔檄爲別駕。祥年垂耳順、固辭不受。覽勸之、爲具車牛、祥乃應召。虔委以州事。于時寇盜充斥、祥率勵兵士、頻討破之。州界清靜、政化大行。時人歌之曰『海沂之康。實賴王祥。邦國不空。別駕之功』」。

なお、『三國志』卷十八呂虔伝には「(呂虔)請琅邪王祥爲別駕、民事一以委之、世多其能任賢」、その裴注所引「王隱晉書」には「祥始出仕、年過五十矣、稍遷至司隸校尉」とあるのみで、「時人歌」の逸話は記されていない。

(7) 陵遲

はかばかしくないこと。徐震罈『世說新語校箋』（中華書局、一九八七年）所収「世說新語詞語簡釋」に「蹉跎、淹滯」と釈義し、本例以外に、賞譽篇第58条の次の例を挙げている。「王（敦）大將軍與丞相（王導）書、稱楊朗曰『世彥識器理致、才隱明斷。既爲國器、且是楊侯准之子。位望殊爲陵遲、卿亦足與之處』」。

(8) 海沂之功

「海沂」は、徐州を指す。『尚書』禹貢に「海岱及淮、惟徐州。淮沂其乂、蒙羽其藝（偽孔伝：二水已治、二山已可種藝）」。

また『文選』卷二十潘岳「金谷集作詩」の第一聯に「王生和鼎實、石子鎮海沂」、その李善注に「石崇金谷詩序曰、余以元康六年、從太僕卿、出爲使持節監青・徐諸軍事」とある。